

日新輝道



東大阪市立日新高等学校

校長室通信 2021.07.08 発行

返事！あいさつ！声！ダッシュ！！

「勝因」とは「一生懸命」「ていねい」「ひたむき」、「敗因」とは「いい加減」「適当」「だいたい」、
今すぐできることは「返事！あいさつ！声！ダッシュ！！」

日新高校は「返事！あいさつ！声！ダッシュ！！」で「日本一」輝きを放つ学校を目指します！

「当たり前」は「感謝」の心で磨き、その質を向上させる！

日新高校では、「当たり前のことを当たり前に実行できる」ということにこだわっています。そのために「一生懸命」「ていねい」「ひたむき」という『勝因』、「いい加減」「適当」「だいたい」という『敗因』について深く考え、「返事！あいさつ！声！ダッシュ！！」を徹底することにこだわって欲しいと思っています。「返事！あいさつ！声！ダッシュ！！」を徹底すれば、日新高校というチーム全体の「空気」が変わり、「当たり前」という感覚も磨かれ、さらなる高い目標に挑む「意識」が高まります。ただし、この「当たり前」は、「感謝」の気持ちで磨かなければなりません。この意味がわかるでしょうか。

先日、体育の授業を見学させていただいたとき、授業を担当されている先生が非常に大切なこととお話しされていました。

1つは、指示に対しての「返事」です。整列した状態から「座ってください」という指示に対して、授業を受けていた生徒は、悪気はありませんが無言のまま行動をしている状況でした。指導されていた先生は、そのような時は、「失礼します」といった返事が必要であることを伝えられていました。このような場面は多々あります。「そのバットをベンチ横に置いておいてください。」「そのゴミ、拾ってくれますか。」と何気ない指示ですが、「はい」と返事をして行動するチームと、無言で行動するチームとでは、必ず結果が変わります。逆に、きびきびと行動できなかったり、「自分の捨てたゴミではない。」と言い訳をするようでは、そのチームは勝てないでしょう。

もう1つは、「有難う」と、言葉に出すことの必要性を伝えられていました。その時、『有難う』の反対は何かわかりますか。それは、『当たり前』なんですよ。」と話されていました。何事も「当たり前」のように感じ、感覚が鈍ってしまっていることに対しての指摘でした。これは本当に大切なことです。体育の授業で先生が話された「当たり前」と、「日新輝道」が伝える「当たり前」とは、意味も質も違いますが、それがわかるでしょうか。

前述しましたが、日新高校では、「当たり前のことを当たり前に実行できる」ということにこだわっています。しかし、その「当たり前」の質を高め、磨き上げるには、「感謝」の気持ちを常に持っていなければなりません。

部活では練習でグラウンドや体育館、道場といった場所を使用しますが、毎日こうした活動場所が準備されているのは当たり前ではありません。誰が使っても良いグラウンドを、限られた時間ではありますが、独占して使用させてもらっているのですから、使用させていただいているという感謝の思いを持ち、有効に、また一生懸命に取り組み、使用しなければなりません。グラウンドや体育館、道場といった場所に出入りする際に「一礼」をするチームや選手がありますが、この「一礼」には、「感謝」の意味が込められています。また、自分の気持ちを整理する意味もこめられています。与えていただいた場所ですから、その場所で一生懸命に活動するのは当然のことです。

大会が始まると、そこには「当たり前」のように、球場やアリーナ、ホールといった会場が準備されています。これらは、審判の方々や、会場で運営をされている方々だけでなく、多くの方々のご尽力で会場の確保や調整、運営が行われています。大会に出場したなら、まずは、ご尽力いただいている方々をはじめ、大会を支えていただいている方々、応援していただいている方々に、感謝の気持ちを持って、全力でのプレーを見ていただきたいものです。大会に出場する選手の振る舞い、全力疾走を怠らないプレー、気持ちのこもった「返事」や「あいさつ」が、大会の質を高めることとなります。「この選手たちのために、大会を運営できてよかったな。」「この選手たちのために、グラウンド確保に尽力してよかったな。」と応援していただける選手であって欲しいと願っています。「一生懸命」「ていねい」「ひたむき」な行動や振る舞いは、人に感動を与えます。

体育の授業で先生が話された「当たり前」は、感覚の鈍った「当たり前」です。「日新輝道」で伝える「当たり前」は感覚を磨いて質を高める「当たり前」です。「有難うございます」の反対は「当たり前」と言われた先生の言葉の意味や、お話された意図を深く受け入れ考えてください。「当たり前」は「感謝」の気持ちで磨きあげるものであるという気持ちを大切に持ち続けてください。日常の「当たり前」が感覚の鈍った「敗因」とならないように心がけてください。

ひとつのことを根気よく続けること、続けたことが力となる！

「高い山を登れば、その向こうに見えるさらに高い山が見える。」これは前人未到の3000試合出場を果たされた元楽天イーグルスの故野村克也氏が残された言葉です。先ほど、「有難うございます。」という言葉について述べましたが、「有難い」という言葉は「難」が「有る」と書きます。「難」が無いことを「無難」と言います。「難」があるのになぜ「有難い」のでしょうか。

故野村克也氏の「高い山を登れば、その向こうに見えるさらに高い山が見える。」という言葉を考えてください。3000試合出場を達成される過程では、最初の出場は誰もが1試合目です。500試合、1000試合と積み重ねられ、そのつど、現状で満足することなくさらに一歩ずつ進まれ、努力を積み重ねてこられたことでしょう。その間、苦しいことも辛いこ

とも数多くあったはずですが、「難」と出会うたびに努力や我慢を重ね、一つずつ乗り越えられた結果です。「難」と出会うたびに、努力をしなければなりませんから、そのつど自分自身に力がつきます。こうして自分を高めることになる結果に感謝の気持ちを持つこととなります。この状況がなければ、こんなに努力をすることもなかったかも知れないと思うと、「難」があることは「感謝」であるのかも知れません。こうしたことは、ノーベル賞授賞式でも多くの方々が話されていました。

また、プロ野球で現役生活を21年間つとめられた、元中日ドラゴンズの森野将彦氏は自身の経験則から次のようなことを話されています。

「頂点を目指して共に戦う同僚は、限られた枠を争うライバルでもある。チーム内には序列があり、その底辺にいる選手たちが戦力外になる。仮にプロ生活が10年あるとしたら、最初の3年でどこまで基本の土台ができたかで決まる。その後の4～6年目である程度勝負できないと早く終わる。ひとつの事を根気強く続けることができない。何かすぐに変えてみようとする。探究心があるという見方もできるかもしれないけれど、何かを極めようとはならない。壁にぶつかると、まず目先を変えてみる。懸命な試行錯誤にも見える一方で、安易な『逃げ』につながっている。わずかの短い時間で去ってゆく選手の、日々の練習を見ていればわかる。長くやれるのは『基本』があるからである。」

日新高校は、「返事！あいさつ！声！ダッシュ！！」を徹底し、「日本一」輝く学校を目指そうとしています。徹底するということを意識してください。徹底すれば必ず「空気」が変わり「当たり前」の意識が変わります。「当たり前」の意識が変われば、さらに高い「目標」が見えてきます。

朝、玄関前であいさつをしていると、きっちり立ち止まって気持ちの良いあいさつをしてくれる生徒がいます。また、校内のあちらこちらで、遠くからでも気持ちの良い声であいさつをしてくれる生徒がいます。来校される方々から、「生徒さんが気持ちの良いあいさつをしてくれました。」と言葉をいただくことも増えてきました。通学途中の駅の改札で駅員さんと、愛ガードのみなさんと、地域や校内のあらゆる場面であいさつをし、素早い行動、規律ある習慣が輝いている学校、常に「感謝」の気持ちを大切にしている学校、日新高校は、そんな輝きを放つ学校でありたいと願っています。